

## 症例をもとにした、高学年の医学部、歯学部、薬学部学生による合同ワークショップの試み

佐藤洋一、田島克巳、相澤純、石崎明、駒野宏人、小笠原邦昭（岩手医科大学全学教育推進機構；医学教育学講座、医学部教務委員会、歯学部教務委員会、薬学部教務委員会）

抄録

**【目的】**一般的に多職種連携教育は、臨床実習の現場でおこなわれているが、それを高学年の多学部学生による症例検討という方式でおこなった場合、どのような教育効果があるかを調べた。

**【方法】**医学部臨床科が4種類の症例を作り、それに歯学部と薬学部の教員が各学体系に合わせて所見や治療薬の情報を盛り込み、参加学生（各学部20名）に呈示する。学生を4グループ（A～D）に分け、特定の症例を割り当てられる。各グループでは医学部学生は、症例の症状や検査値の意味、病態生理、またどのような治療方針がたてられるか、等を検討する。歯学部学生は、口腔の症状（あるいは口腔治療）が、どういう全身状態を引き起こすか、あるいはその逆に全身の異常が、口腔領域でどのような病変を生じるかを調べる。薬学部学生は、処方についての解析を行い、どういう点に注意して処方してもらうかを明らかにする。次いで三学部学生が合同で症例解説のプレゼンテーションをおこなう。翌日ブラッシュアップした発表資料と、感想文、およびアンケートを提出する。各学部の教員はグループワークにおける態度と発表資料を対象として評価する。このコースは自由選択科目とし、0.5単位を付与する。

**【結果】**歯・薬学部学生にとっては、学修対象の視点を「病気」から「病人」へ変えるきっかけとなり、自己の専門知識が医療現場で如何に活かされるかを実感した。医学部学生にとっては、他の専門職種へ説明することがいかに大変かを知るとともに、他職種の専門性を認識した。三学部の参加教員間でも交流が進み、研究・教育面でのシーズ交換がなされた。

**【結論】**認知領域教材を題材にした多職種連携教育が、どのような効果があるかを検討した。その結果、自らの専門職に対する誇りを持つ、他職種への尊敬の念を抱き、他学部教員と共同関係を構築できた。